ペンシルヴァニア建設者ウィリアム・ペン
波瀾多き生涯

（遺稿）月地冬二

ウィリアム・ペンは海軍提督ウィリアム・ペンの長男として1664年ロンドンの Tower Hill で生れた。生まれながらにして品位ある児であった。提督は大いに喜び，此の児は将来大きい事業を成すであろうと思い，提督と同じ名を与えた。

彼は Essex 州の Chigwell にある Grammar School に通った。提督は時の執政総督官クロムウエルより功労の賞として，アイルランド Cork 府近くの荘園を賜ったので，家族を連れて其の地に行った。その頃英国に於てクエーカーと名乗るキリスト教の一派が起り，その説教者 Thomas Loe が提督の邸宅近くの村に伝道しておる由を聞いて，提督はその性質として，凡そ如何なる論説にせよ，その是非を論ずる前に詳しくその説を聞く必要ありとし，Loe を自邸に招いて彼の説を聞いた。

Loe は着実誠意の人，その説くところは一座の者に深い感銘を与えた。少年ペンも幼な心にその場の印象を深く心に刻みつけたと云われている。さて少年ペンは十五才になった時 Oxford に入学し，読書勉学の暇には戸外運動で身体を練磨し，一方 John Locke, Robert Spenser のような後年名をあげた友と交った。

ペンは或る日，クエーカーの集会場に赴くと此の日の説教者は，幼い頃その説教を聞き，今尚ペンの記憶にありありと刻みこんだ Thomas Loe であった。此の人は Oxford 大学出身でその日の説教「世に勝つ信仰あり，世に勝たるる信仰あり」は，ペンの心に深き感銘を与えた。少年ペンは度々 Loe の説教をきき，益々心をクエーカー主義に注ぎ，同じ主義の友と語りあい，集会を設けて信仰の道を進んだ。そして遂には礼拝式を破ったという罪によって，罰金を科せられた。

チャールス二世は臣下の自由権利を踏みにじり，各地の大学校ではその学生は僧侶の用いる白袈裟を着用するようにとの命令を出した。

ペンは，王たる者がこのような詔を発するのは王権の濫用であるとして，同志と心を合わせて反対運動を起し，大学を追放されるに至った。確かにペンは面目を失って大学を退いた。父ウィリアム・ペン卿は怒りの余り長男を打ち，家から追い出した。冷静になるとウィリアム卿は，彼の地位にふさわしい最も分別のある方法で，その息子をフランス，イタリーへの大旅行に赴かしめた。勿論広き世界を見，フランスの宮廷に出入りするようになれば，息子の愚行も癒されるであろうとの見地からである。然し此所ですらウィリアムは，その真面目の態度をくずさなかった。パリの歓楽の後（ヴェルサイユ宮殿はまだ建てられていなかった），彼はソームル（Saumur）に移った。ペンがここに来たのは，有名な Moses Amyraut 氏より教えを受けるためであった。Amyraut 氏はカルヴィン派の牧師で神学の教授を兼ね，博識を以て著名であった。ペンは此の教授の下で，神学を研究し，仏語にも精通することが出来た。

彼は英国に帰ると，父の提案にもとずき，Lincoln, s Inn（四法学院の一つ）で法律を勉強することになった。その時第二のオランダ戦が勃発し，ウィリアム卿はヨーク侯（後の James二世）の下に艦隊の艦長に任命された。1665年のオランダに対する輝かしい勝利の喜びも，悪疫（黒死病）の蔓延によって出端をくじかれてしまった。何千人と云う人々が死んだ。ロンドン市街には死臭が漂った。かねて George Fox が説いていた，人間の虚栄の空しさや浮世

の束の間の歓楽に対する霊の実在に就て，これより大きな証拠は無かった。

1669年ペンは三位一体説に反対した行為のため，ロンドン塔に投げこまれた。このロンドン塔は英国歴史を読んだ者は皆知る所で，堅固な城壁を以て四面をとり囲み，巨石を積み重ねた要害無比の建物で，国事犯，或は重罪犯人を投げ入れるべき獄舎である。ペンは此の獄舎に閉じ込められていた間に一の論文を書いた。これ即ち *NO CROSS, NO CROWN* である。

今日より当時の社会を回顧すれば，英国人民の自由独立の気象は，正に此の小室より出たに外ならぬ。或は人民の権利を主張するために，暴虐な帝王の嫌疑を蒙って此の室内に押し込められ，或はペンの如き信教の自由を亨んとして此の内に幾十百の者が繋れたが，一人として其の説を変える者は無い許りでなく，この縄目の恥辱をも甘んじて受けつつ，信念を守りとおしたのである。数世紀を経た今日より当時を追憶すれば，此の人達でこのいまわしい獄舎に投げ込まれた為め，英国歴史は逆に光を放ち，遂に文明進化の国となったのだと云えよう。

ペンシルヴァニア：神聖なる実験

1670年に彼の父が死亡するやウィリアム・ペンはイングランド及びアイルランドの財産の所有者となり，一年に約千五百ポンドの収入があった。一家の者達はペンの無分別の終ることを希望していた。ところがペンは再び Newgate に監禁された。彼曰く、「私は受難に値せぬ宗教を軽蔑する」と。まもなくペンは解放され静かな生活に入った。1672年4月，彼は Gulielma Springett と結婚した。

それは同趣味の結婚であった許りでなく，恋愛結婚でもあった。此の年は，クエーカー運動に対して空は一時晴れ渡ったように思えた。

チャールス王は信仰自由令を発布し、非国教徒，カトリックに対する凡ての法令は停止された。多くのクエーカー達は牢獄から解放された。然しながらそれはほんの暫時の休止であった。教会と議会との圧迫は此の法令を次の年に取消さしめた。ペンは著述，説教を続けた。そして1673年五ケ年の不在の後帰って，George Fox を牢から救い出すために York 侯との親交を利用した。この時，彼の生涯の最も重大な時期が始まった。彼はハドソン川とデラウェア川の土地を獲得した二人のフレンズの間の論争の調停者として，その中に入り，双方の議論の要旨を聞きとり，各々に満足を与えて双方共に喜んだとの事である。ペンは West New Jersey の此の新しい植民地のために憲法を作成した。これは，その民主的政治条項，礼拝の自由の保障，新世界へのクエーカーの旅行免状等のため，苦しいものであった。ほどなく East New Jersey が売りに出された時，彼は此の土地の所有主となった。1677年ペンは Fox，その他のフレンズに伴い，オランダ，ドイツに行った。彼はここで非国教徒が良心のために苦闘しているのを知った。国に帰るや彼は政治に力を入れ，その友 Algernon Sidney を選挙戦に於て援助した。New Jersey の植民の成功は更に一層の大望を彼に思い起させた，即ちそれと並んで良き政治の典型となるような植民地を建設すること——フレンド教徒許りでなく，到る所の迫害された人々が自由に生活し，働くことが出来る国を建てることであった。それは彼の「神聖な実験」と呼ばれた。

ペンはかねて国王の財政不如意を察し，或る日王に向って進言した——「国王より賜はるべき償金は通貨を以てせられる代りに，アメリカの不毛の土地を下付せられたし」と。国王は其の申し出を大に喜び，1681年3月4日付の勅許状に特権を確定し，新州の領主となし，兼ねてペンを其の地の知事に任じられた。このような不毛の大原野を特に望んだペンの胸中を察すれば，彼は胸中に深く描いた理想の新しい国を経営し，法律制度を始めとし，一切を自分の計画に従って運営し，理想を実行する一大試験場となすためであった。

此の広大な肥沃の土地の所有者・知事として彼は直ちに，既に植民せる人々やインディアンに彼の良き考えを伝えて彼等を安心させた。彼は従兄弟の Sir William Markheim を彼の代理に任命し，彼と共に三人の事務官を彼の地に送った。

学識あるフレンドや Algernon Sidney と相談してペンが国のために作成した憲法は，選挙による民主的政治に対する条項に於て細心なる許りでなく，自由な慈悲深い主義に於て時代に先んずるものであった。礼拝の絶対的自由が保証された。日曜日には労働は行わない事になっていたが，礼拝所に出席しなくても科料に処せられることは無かった。凡ての裁判は宣誓を行うことなしに，陪審員によって行われる事になっていた。そして死刑は只悪意ある殺人に対してのみ定められていた。牢獄は仕事及び改善のための場所であるべきであった。重罪犯人は，彼が傷つけた家族に対して，出来るならば彼の財産から賠償をなすべきであった。子供等は十二才から商売を教えこまれる事になっていた。

1682年ペンは最愛の妻や三人の子供等に別れを告げ，百人の移民達をつれて， Welcome 号に乗って九週間の航海に出発した。

ペンは到着するや直ちに Delaware 川のほとりでインディアンの酋長たちと会見し，条約を結んだ。この条約は決して破られる事が無かった。

「……神は，私と私の仲間が，諸君と共に平和と友愛とによって暮して行き度いと願い，出来るだけ諸君のためになり度いと思っている事を，よく承知されて居られる。人間同士がたがいに武器を持って戦わない事が私の習わしである。私たちは人を傷け，神を怒らすことなど少しも考えていない。信じあうことと正しい心とが私たちの行くべき道であり，この道の上で私たちは今日此処で出会ったのである。お互いが此処で隙に乗ずることはありえない。胸を開いて友として，愛をもって此処に集まったのである。諸君を子と呼び兄弟と呼ぶことはすまい。何故ならば親は子を打つ事があり，兄弟は意見を異にする事があるからである。私たちの友情を鎖にたとえることもしない。鎖は雨にぬれて腐り，木が倒れれば切れることもあるからである。私は諸君を私たちと同じキリスト教徒と考え，同じ血を分けた者と思い度い。私は一人の体が二つの体に分れたのだと考え度い。」

近時の歴史家 Bancroft は曰う，「ペンが土人と条約を結んだ頃は，恰も英国政府がアメリカ土人を征伐した時で殺気なお消えなかった時であったけれども，ペンは武器一つ持たず，唯平和と愛を以て交ったので，彼の生存の間は，アメリカ土人の怒を受けて殺害された白人は無かった。」

政治家の苦悩

ウィリアム・ペンは，George Fox や他のクエーカーの指導者たちと違って，極めて困難な国家事件に巻きこまれた。そして彼の生涯の後半に於てペンはクエーカー主義のために説教したり，文書を作ったり，各地を旅行したりして彼の才能，精力の大部分を捧げた。勿論クエーカー主義は彼にとって生きる道であった。絶えざる活動の長き生涯の終りの頃反逆罪に問われたり，借金のために投獄されたり，息子の不品行のために，心身共に打ちのめされた。それのみか妻の長期療養とその死，続いて長男の死等，重ね重ねの打撃を受けた。1706年彼は再び結婚した。その婦人は Hannah Callowhill と云い，愛情深き性格の持主であった。

七十の齢を重ね，健康も衰え，その上植民地に於ける様々な雑事に心を労することが甚しかった。

1718年彼は遂に此の世を去った。彼の亡き骸は，彼が日頃通ったバッキングァム州の礼拝堂の墓地に葬られた。クエーカー主義はその最も美しい，色彩に富んだ人物の一人を失った。

己が心の中に神の声を聞いた少年ペンは，生い立ってロンドン塔の中から叫んで云った，「この牢獄の中で死んでも一歩も退きはしない。私に良心を与えてくれたものは人間では無いのだ。」彼は大胆にも武器を持たずにインディアン達の間に交わって彼等の友となり，宗教的自由と民主主義に基礎をおく一つの大きな州を創設した。

次の証言はフレンズによって記録に留められている。「彼は手腕家であり，いと優しき気質の人であった。弁才あり，知識も広く，憐れみの心も深かった。敵を許すに吝ならず，度量の大きな人であった。少しも野心を持たず，見苦しき軽薄さは微塵も無かった。堅苦しい威厳を

示すことも全く無かった。人間的でありながら，学者であり，友人であった。比類なき思索的才能に恵まれた伝道師であった。」

ウイリアムペンの文学的業績

ペンは宗教の寛容，一般民の自由，代議制度の主なる主張者として，アメリカの歴史に不朽の地位を占めている。然しながら後の名声は，アメリカ国の創造への是等の重要な貢献にのみ基くものではない。

ペンは退隠中，政治上の性質をおびる著述をなした。けれども是とてその本旨は博愛的，宗教的なものであった。当時欧州各国の国民は概ね残忍な戦争のために苦しんでいたので，ペンは是を悲しみ，国民間の不和を調停するために戦争の如き残忍なる手段を用いず，一層理に合う方法を取るべき事を当時の人々に知らしめんと欲し，次の如き書を著した。

An Essay Towards the Present and Future Peace of Europe—by the Establishment of an European Diet, Parliament, or Estates" (1893) 即ちペンは各国の大会議を開き，欧州の現在及び未来の平和を保持すべき論を提唱した。彼は，此の手段を取るに於ては大概の戦争の原因は兵力を用いる事なくて取り去る事が出来ると確信した。(e)

次の二名著は幸いにも一覧することが出来たので，少し此に触れてみよう。

(1) *NO CROSS, NO CROWN*

前置き

二世紀半の間に於て *NO CROSS, NO CROWN* に対する評価は，我々の知る限りでは，1682年に五十三版が出版されたという事以外には殆んど無い。

フランスの逃亡者ステファン・グレー (Stephen Grellet 後には有名なクエーカーの宣教師) は1795年ニューヨーク州ロング・アイランドに居る時，彼の「回顧録」の中で述べている，——「私はウィリアム・ペンの作品を取り上げて *NO CROSS, NO CROWN* を開いた。その書名だけが私の心に達した。私は辞書をたよりに，殆んど凡ての単語の意味を求めながら，之を読みつづけた。私は此の時程神の証言が私の中に力強く働くのを感じたことが無い。」

Charles Lamb は1797年に S. T. Coleridge に手紙を送った。: "I am just beginning to read most capital book, good thoughts in good language —— William Penn's 'NO CROSS, NO CROWN.' I like it immensely".

1798年三人のクエーカー婦人宣教師 Sarah Harrison, Charity Cook 及び Mary Swett がドイツに於て三日間昼夜とも三人の兵士の監視つきで幽閉された。一人のフレンドが書いている。「我々は彼等に *NO CROSS, NO CROWN* を貸してあげた。見張人の一人は以前牧師であった。この人は，此の書に示された真理に屈して，以後は態度も優しくなった。」と

序　文

読者よ，人生の大事は人が此の世に生をうけたその目的に答うるにある，即ちそれは神の栄光を表わし，彼自身の生命を救うにある。此は天地と共に古き神の掟である。然しながら人は彼が最も心すべきことをなおざりにし，彼自身の実在，その本来の義務と目的とは調べることを怠る。むしろ彼の心の誇り，貪欲，贅沢を満足させるために日々を捧げる。かくて神の掟に従わず，してはならぬ事をなして，為すべき事をなさず，哀れむべき状態を彼自身にもたらした。此の疾患が人間に続くかぎり，彼は神を敵となし，自らは神の御子イエス・キリストに依て世に現わしたる愛と救を享けることが出来ないようになる。

読者よ，御身がかような人間であるならば，御身に対する私の忠告は，自身の衷に退き，御身の魂の状態を考察することである。注意深く完全に探しなさい。御身の生命はその中にある。御身の魂がかかわっている。御身は大きな忍耐を以て為さねばならない。然しそれは又目的を持たねばならぬ。それ故御身の造り主なる神の御心を害わぬようにしなさい。御身はそれが何であるか知っているか。それは地獄である。呪われた人々の永久の苦悩である。

おお読者よ，神の畏るべき事を知るが故に，勧める。正しい道の慰籍，平安，喜びを知るが

故に御身に勧める。御身の良心の中にあるキリストの光と御霊の責めるところを受け入れ，御身が犯せる罪の裁きを受けなさい。

火は唯刈株を焼く，風は唯もみがらを吹く，御身の心も身も霊も神に捧げよ。神は万物を一新するであろう。新しき天，新しき地，新しき愛，新しき喜び，新しき平和，新しき仕事，新しき生命と親交は生れ出でよう。

人々は罪によって汚れ，不純となる。彼等は火によって救われねばならない。火は罪を浄める。それ故に神は炉火にたとえられる。救いの日は天火にたとえられる。キリストは銀の製練者にたとえられる。

読者よ，しばらく私の申すことをおききなさい。私は御身の救ひを求める。それは私の計画である。御身は私を許すであろう。神は御身の近くに在す。神の恵みは御身に現はれた。それは御身に浮世の欲望を示す。そして御身にそれを拒否することを教える。

神のパン種を受けなさい。そうすれば其は御身を変えるであろう。神の薬を受けなさい。そうすればそれは御身を癒すであろう。神は自由無碍で絶対確実である。昔神の裾に触れれば病も癒えた。今もそうである。神の知恵は鉛を金にする。悪しき者を貴き者に変える。

我々が神の力と愛の証人となるために，我々がなさねばならない所の何が，我々にあるか。

此は栄冠である。然し十字架はどこにあるか。苦いコップと血の洗礼である。

読者よ，キリストの十字架はキリストの栄冠に至るキリストの道である。此の書は之を論ずる。即ち1669年に私がロンドン塔につながれている間に著した論文である。今大いに増補して再び出版するは読者をキリストに従はしめんためである。又己に従へるなれば，一層キリストに近づかしめんためである。

神は二十二才の青春の時に，永久の恵めを以て私を導びき到らせ給へる道はそれである。その時神は私の手を取り，私を浮世の快楽，虚栄，欲望の外に連れ出し給ふた。

私は世間の渋面や非難を味った。私は自分の経験を喜ぶ。そして御身がキリストに従うように之を捧げる。それは私が永い間負うていた恩恵である。私は永い間その返済を期待されていた。私は今その負債を支払った。そして私の魂を救った。私は国に対し又キリスト教徒の世界に対して其を残す。

神よ，願はくば，其を彼等すべてに対して有効ならしめたまえ。又彼等の心をそねみ，憎しみから解き放ちたまえ。人類の共通の敵なる世俗肉欲，悪魔に対して三種の同盟を結びますように，そして自己否定を通じて，イエスの十字架の力によって，彼等が遂に神の永遠の安息と王国に達しますように

かく願いかく祈りつつ

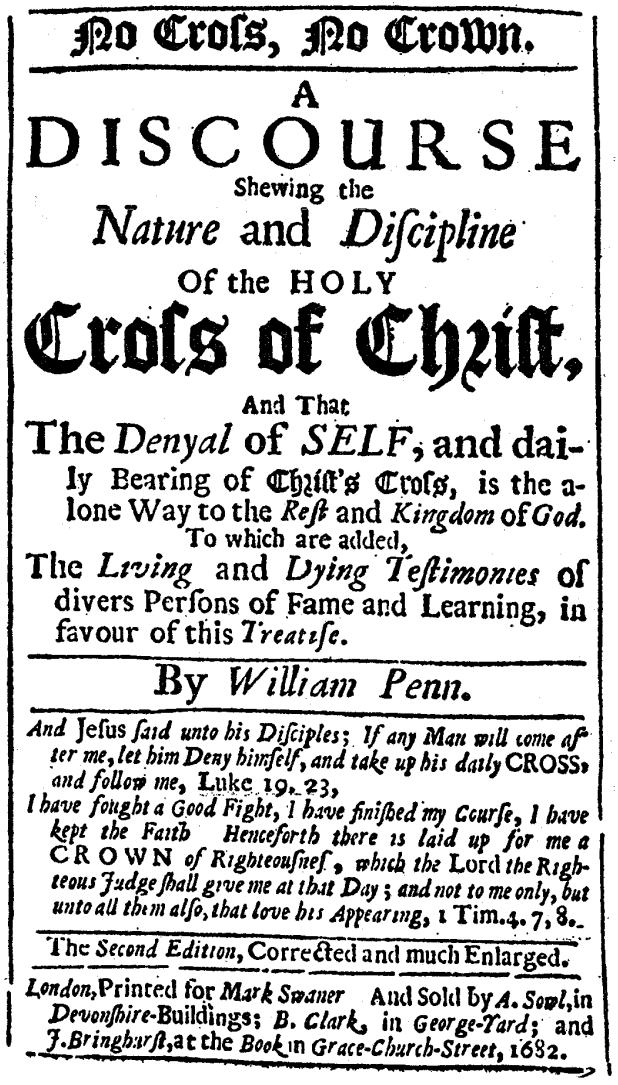
親しき読者よ

Warminghurst in Sussex

1682年6月1日

御身の熱烈なるフレンド，

ウィリアム・ペン



No Crofs, No Crown.

A DISCOURSE Shewing the *Nature* and *Difcipline* Of the HOLY Crofs of Chrift,

And That The *Denyal* of *SELF*, and daily Bearing of Chrift's Crofs, is the alone Way to the *Reft* and *Kingdom* of *God*.

To which are added, The *Living* and *Dying Teftimonies* of divers Perfons of Fame and Learning, in favour of this *Treatife*.

By *William Penn*.

And Jefus *faid unto his Difciples; If any Man will come after me, let him Deny himfelf, and take up his daily* CROSS, *and follow me*, Luke 19. 23,

I have fought a Good Fight, I have finifhed my Courfe, I have kept the Faith Henceforth there is laid up for me a CROWN *of Righteoufnef, which the* Lord *the Righteous Judge fhall give me at that Day; and not to me only, but unto all them alfo, that love his Appearing*, 1 Tim. 4. 7, 8.

The *Second Edition*, Corrected and much Enlarged.

London, Printed for *Mark Swaner* And Sold by *A. Sowl*, in *Devonfhire*-Buildings; *B. Clark*, in *George-Yard*; and *J. Bringhurft*, at the *Book* in *Grace-Church-Street*, 1682.

『苦難なくして栄冠なし』精選抄

But, thou wilt say, What is Christ? and where is He to be found? and how received and applied, in order to this mighty cure? I tell thee then first, He is the great spiritual light of the world that enlightens every one that come into the world; by which He manifests to them their deeds of darrkness and wickedness, and reproves them for committing them. Secondly, He is not far away from thee (Acts xvii, 27), as the Apostle Paul said of God to the Athenians. "Behold," says Christ Himself, "I stand at the door and knock; if any man hear my voice, and open the door, I will come in to him, aud sup with him, and he with me (Rev. iii, 20). What door can This de but that of the heart of man?

Chap. 11 Sect. 20

然し汝はいわん，キリストは何者ぞや，彼は何処に居るや，此の偉大なる救治を受けんが為めに，彼を迎え彼に依頼する方法は如何。第一に彼は世に生れくる凡ての人々を照す世の偉大なる霊の光なり。此の光によって彼は人々の暗き悪しき行為を顕はし，その罪を責め給う。第二は使徒パウロがアテネ人に対して神の事を云えるが如く，キリストは汝に遠かからず（使徒行伝十七章二十七節)。キリスト自ら曰く，「見よ，我戸の外に立ちて叩く，もしわが声を聞きて戸を開く者あらば我その内に入りて彼とともに食し，彼もまた我とともに食せん。（ヨハネ黙示録第三章十八節)

Nor is a recluse life, the boasted righteousness of some, much more commendable, or one whit nearer to the nature of the true cross: for if it be not unlawful as other things are, it is unnatural, which true religion teaches not. The Christian convent and monastery are within, where the soul is encloistered from sin. And this religious house the true foollowers of Christ carry about with them, who exempt not themselves from the conversation of the world, though they keep themselves from the evil of the world in their conversation. (Chap. V Sect. 10)

人々の中には隠遁の生活の正しい事を誇る者も居るが，隠遁の生活は大いに称讃すべきものではない，真の十字架の性質により近いものでもない。何故なればそれは他の物事の如く，不法ではないにしても，それは不自然である。真の宗教はそれを教えぬ。キリスト教徒の隠るべき庵は心の内にある。この神聖な庵は，その魂が罪を逃れて閉じてもれる所である。真のキリスト信奉者は何処に行くも此の神聖な庵を携うるが故に，世の交りを避けぬが，さりとて世に交ってもその悪に染まぬ。

Another time, we have him (3) crying thus: "As the hart panteth, after the water-brooks, so panteth my soul after thee, O God. My soul thirsteth for God, for the living God; when shall I come and appear before God?" This goes beyond formality, and can be tied no lesson. But we may by this see that true worship is an inward work; that the soul must be touched and raised in its heavenly desires by the heavenly presence. When shall I come and appear? Not in the temple, nor with outward sacrifices, but before God in his presence. So that souls of true worshippers see God, make their appearance before Him; and this they wait, they pant, they thirst for. (Chap. VI Sect. 10)

別の折，詩篇の著者ダビデはかく叫んだ，「アア神よ，鹿が小川の水を慕い喘ぐが如く我魂も汝を慕い喘ぐ。我魂は渇けるが如く神を慕う，活ける神をば慕う。何れの時に我は行きて神のみ前に出でよう？これは儀式の外にあり，日課にしばられるものでない。これによって知る真の礼拝は心の所為なることを。又魂は天の霊に感動し，天の欲を起さねばならないことを。又真の礼拝は神のみ前にある事を。何れの

時に我は行きてみ前に出でよう？神殿の内ではない。又形式的犠牲を携えてでもない。只神のみ前にある許りである。それ故真の礼拝者の魂は神のみ前に出で，神を仰ぎ見たてまつる。彼等が待ち望み，慕い喘ぐは即ちこれである。

ウィリアム・ペンは其の退隠中有名な一書を著わした。名づけて『独居の結果』と云う。

(2) *Some Fruits of Solitude*

前置き

Robert Louis Stevenson の手紙の中には『独居の結果』に対する彼の温い賛美を表わすいくつかの文章が見られる。彼はその手に入った此のささやかな金言集によって，どれ程力づけられたかは彼の次の文章が示している。

Sometime later, he presented a copy of *Fruits of Solitude* to his friend Horatio F. Brown, and wrote with it: "If ever in all 'human condut' I have done a better thing to any fellow creature than handing on to you this sweet, dignified, and wholesome book, I know I shall hear of it on the last day."

Later he writes again to the same friend: "I hope, if you get thus for, you will know what an invaluable present I have made you. Even the copy was dear to me, printed in the colony that Penn established and carried in my pocket all about the San Francisco streets, read in streetcars and ferryboats, when I was sick unto death, and found in all my times and places a peaceful and sweet companion. But I hope, when you shall have reached this note, my gift wil not have been in vain; for while, just now, we are so busy and intelligent, there is not the man living--no, not recently dead--that could put, with so lovely a spirit, so much honest, kind wisdom into words."（アンダーラインは筆者による）

序文

読者よ，今読者に示そうとする一書は『独居の結果』である。独居は最もよく我々を教える学校であるが此処に学ぼうとする人は少ない。此の書に記すものは沈思黙考より得たるものもあれば，また閃々として瞬時に感得したものもある。もとは自己の満足のために認めたものであるが，今人間行為の助けとなさんとして之を公にする次第である。

著者はその独居・生活のために神に謝す，又之に導きたまえる温和の手に接吻する。思うに世間の人々にとっては独居は無意味であろうが著者にとっては決して然らず。今や著者は漸く自己の時間と云う者を持った。此の時間の所有主になった事は前にはそれ程ない。此の時に於て著者は自己と世界とを観察し，その的に当った点，又は外れた点を注意した。その上人間の行為に於てもっと心して為したならば避けられたであろうと思われた点，或は修正されたであろう点などを考究した。一個人，家族，或は社会に於ての行為を視察した。

思うに若し著者にして，再び己が生活を繰り返す事が出来れば，神の恩寵により之れ迄よりもよく神に仕える許りでなく，同胞にも自己にもよく仕える事が出来，なお七年間も余すことが出来ようと。

だが著者は必ずしも世界中の最も悪しき人，又は最も懶怠な人ではない。又最も年長の人でもない。かく云う所以のものは読者を醒まし時間の未だ去らぬうちに之を失わないように務めん為めである。

世間には時間程無益に費し易いものはない。けれども世に時間なければ何事も為す事が出来ないから，我々は慎しんで無益に之を費さぬよう心すべきである。時間は我々の最も必要とするものである。けれども悲しいことに我々は之を最も悪く用いる。それ故時間の最早なくなる時に至って，神は厳密に公正に我々を処理し給うであろう。

「独居の結果」精選抄

500. For tho' Death be a Dark Passage, it leads to immortality, and that's Recompence enough for Suffering.

死は暗い通路ではあるけれども，それは永遠

に通ずる道である。だからしてそれは死の苦しみを償うて余りがある。

503. For Death is no more than a Turning of us over from Time to Eternity.

死は我々を有限の時間から永遠に引き渡すことに過ぎない。

505. Death then, being the Way and Condition of Life, we cannot love to live, if we cannot bear to die.

死とは世の人の皆行く道であり人の世のさだめなれば，死ぬことに堪えることが出来ないようでは，生を楽しむことは出来ない。

507. This World is a Form; our Bodies are Forms; no visible Acts of Devotion can be without Forms. But yet the less Form in religion the better, since God is a Spirit: For the more mental our Worship, the more adequate to the Nature of God; the more suitable to the Language of Spirit.

此の世は外形であり，我々の身体も外形である。そして信仰上の目に見える行為も外形を持たざるを得ない。然しながら宗教に於いては，外形が少なければ少い程よい，神は霊だからである。我々の礼拝が精神的であればある程神の本性にふさわしくなる。そして礼拝が静かなればなる程ますます神の言葉にふさわしくなる。

519. The Humble, Meek, Merciful, Just, Pious and Devout Souls, are everywhere of one religion; and when Death has taken off the Mask, they will know one another, tho' the diverse Liveries they wear here make them Strangers.

謙遜な者，温順な者，慈悲深い者，正しい者，敬虔な者，信心深い者は，皆どこの人間であろうと同じ宗教を持つ人間である。それ故此の世では彼等のまとう異った制服のゆえに未知の者となっていても，死がマスクを取りはずす時，彼等はお互に知っていることがわかる。

参考文献

Vernon Noble 著 William Penn

新渡戸稲造著　ウイリアム・ペン伝特に第三章・第二十章を精読し得るところ多大であった。

Notes (1) 新渡戸稲造著　建国美談 138-9頁参照

(2) 同　ウイリアム・ペン伝 560頁